

中山間地域に居住する高齢者の地域生活とQOL評価の関係

高齢者のQOL向上に向けた福祉のまちづくりに関する研究

三宮 基裕 井上 孝徳 川崎 順子*

Correlations between social life and QOL of elderly persons living in mountain villages
A study of the effects of rural planning on community development and the welfare
improvements in terms of QOL of elderly persons

Motohiro Sannomiya Takanori Inoue Yoshiko Kawasaki*

Abstract

This study examined the impact of rural planning on community development related to improvements in the level of QOL (Quality of Life) of elderly persons. In this report, we conducted a correlational analysis of social life and the QOL evaluation of elderly persons living in the mountainous villages. We interviewed elderly persons living in the mountainous villages regarding their conditions of their social life, and whether they were living alone. In general, elderly persons had low evaluations on QOL on health and use of facilities for travel. The elderly persons who had high QOL evaluations had outdoors activities and their families often visited their homes. In order to elevate the quality of life in these settings, it will be necessary to support activities outside the home and to build a system that facilitates for travel without constraint. This could be an effective method to increase periodic visits from their families, which would enhance the level of QOL for these persons.

Key words : Elderly persons, Quality of life, Social life, Community development and the welfare, Mountainous villages

キーワード : 高齢者 生活の質 地域生活 福祉のまちづくり 中山間地域

2010.11.17 受理

はじめに

これまでの福祉のまちづくりは、バリアフリーのようなハード面と福祉サービスなどのソフト面が、それぞれのアプローチで進められてきた。住民のQOL (Quality of Life : 生活の質) の維持、向上の視点に立てば、両者を一体的に進めることでより効果を発揮するものである。超高齢社会を迎え、本格的に福祉のまちづくりに取り組んでいく必要がある今日、高齢者のQOL維持、向

上に向けた福祉のまちづくりの方策を見出すことは急務の課題である。

本研究は、高齢化の進展が著しい中山間地域に居住する高齢者を対象に、地域生活として外出行動と交流関係に注目してその実態を明らかにし、QOL評価と関係づけて考察することで、中山間地域に居住する高齢者のQOL維持、向上に資する福祉のまちづくりの基本的な要件の抽出を試みることを目的とする。

九州保健福祉大学 社会福祉学部 臨床福祉学科

*九州保健福祉大学 社会福祉学部 スポーツ健康福祉学科

〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare

*Department of Sports Health and Welfare, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare

1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882-8508, Japan

調査概要

1. 調査対象地域

宮崎県美郷町南郷区（以下、N区）を調査対象地域として選定した。美郷町は宮崎県央に位置する中山間地域で、平成18年1月に西郷村、北郷村、南郷村が合併して成立した。第1次産業の割合は県全体よりも高い3割で、農業と林業が盛んである。人口は6,871人（平成21年4月現在）で高齢化率は42.3%（平成19年10月現在）であり、宮崎県内でもトップクラスの高齢化率である。

N区は宮崎県日向市より続く国道沿いにあり、同市から約40km、標高約250mの場所に位置する。

公共交通機関は、N区と日向市とを結ぶ1日4往復の路線バスと、美郷町がN区タクシー会社に委託運行している乗合タクシー、そしてN区内にある1か所のタクシー会社である。N区発の1日4便の路線バスうち3便は午前8時までに集中しており、主に通学用として運行している。乗合タクシーはN区内の2コースが定期路線として準備され、コース外の地域は前日までの電話連絡により路線が追加・変更されるデマンド方式で対応している。運行コースはN区の中心部とN区の各地区との往復である。運賃は路線内昇降自由の一律300円である。

N区は社会福祉協議会の活動が盛んである。高齢のため高所の大工仕事ができなくなった職人有志で匠の会を組織し、高齢者の住む住宅の簡単な修繕を仲介したり、参加者自身が材料を持ち寄り漬物などを生産し販売する生産型サロンを実施したりするなど、住民参加型の独自の事業を展開し、住民の福祉に寄与している。

本研究は、非常に高い高齢化率と、以上のようなソフト面での福祉のまちづくりが盛んなN区に注目して、調査対象地域として選定した。

2. 調査方法

N区に居住する単身、夫婦の高齢者世帯を訪問し、ヒアリング調査を実施した。単身、夫婦世帯に限定したのは、家族による介護力が低く地域からの支援が求められ、福祉のまちづくりにおいて優先的に検討すべき住民世帯と考えたためである。ヒアリングの内容は、①基本属性（性別・年齢・就業状況・移動手段など）②家族関係（子どもや親族との付き合い）③外出行動（目的・頻度・移動手段など）④交流関係（訪問・来訪の状況）⑤緊急時の対応（生活の不安・緊急連絡先）である。

あわせてWHO QOL26の質問紙を用いてQOL評価を行った。本質問紙は26の質問項目¹⁾から成るが、調査対象者を勘案し、Q11、Q17、Q21、Q26を除く22項

目について回答を得た。

調査時期は2009年12月から翌年2月である。

3. 調査対象地区と対象者数

N区は、町役場支所や国保診療所、食品を扱う店舗などがある中心部のI地区を含め、小学校区により大きく4つの地区に区分されている。I地区は幹線道路に沿う所とそうでない所が混在している。I地区の幹線道路はN区唯一のバス路線でもあるので、道路沿いか否かの差は外出行動にも影響を与える。そこで、中心部のI地区、幹線道路から外れたI₀地区、その他をII地区、III地区、IV地区として、それぞれの地区に居住する高齢者を対象に調査を計画した（図1）。

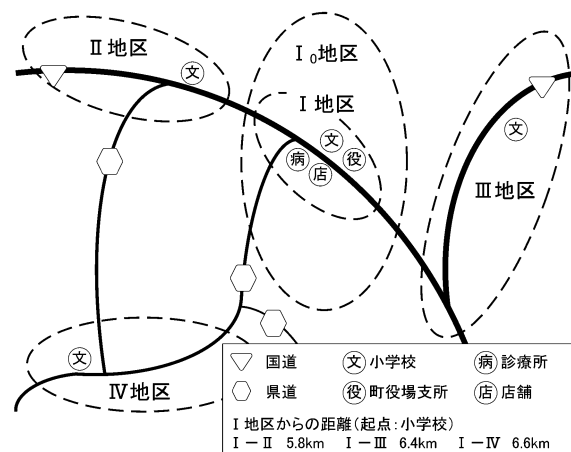


図1 N区の地区区分

調査対象者は、自力での外出が可能であることを条件として、N区の社会福祉協議会に選定を依頼し、同意の得られたI地区9世帯12名、I₀地区3世帯3名、II地区6世帯6名、III地区4世帯5名、IV地区4世帯4名の計26世帯30名を対象に実施した。世帯構成は単身19名、夫婦7世帯11名である。各地区の世帯構成は表1のとおりである。

表1 地区別の対象者数と世帯構成

世帯構成	I地区	I ₀ 地区	II地区	III地区	IV地区	計
単身	4	3	6	3	3	19
夫婦	8(5)	0	0	2(1)	1(1)	11(7)
計	12(9)	3(3)	6(6)	5(4)	4(4)	30(26)

単位：名（世帯）

結果と考察

1. 対象者の属性

1) 性別、平均年齢、居住歴

調査対象者の性別構成は、男性11名、女性19名である。平均年齢は77.5歳で、男性80.4歳、女性75.9歳で男性がやや高い。世帯構成および居住地区ごとの特徴的な差異はみられなかった。

N区での居住歴は、区外への転居歴がない方は21名（70.0%）で、転居歴があるのは9名（30.0%）であった。転居の理由として、男性は仕事、女性は結婚が主であった。

2) 健康状態

表2に健康面で不安に感じている事項を整理した。健康状態が良好と回答した方は7名（23.3%）で、23名（76.7%）は足元不安定のほか、股関節や膝関節痛、糖尿病など何らかの健康問題を抱えている。なかでも下半身に関わる問題（表中右列）を挙げる方が多く、高齢期には歩行に困難をきたす場合が多いことがうかがえる。

表2 健康状態（複数回答）

健康状態	人数	健康状態	人数
良好	7	腰痛	3
リウマチによる手指の変形	2	股関節痛	1
炎症による手指痛	1	膝関節痛	6
視力低下	2	膝下のしびれ	1
心筋梗塞	1	足元不安定	7
糖尿病	1	起居動作が不安定	6
高血圧	1	片足切断	1

単位:名

3) 移動手段

普段の移動においては16名（53.3%）が福祉用具を使用しており、その内訳は、杖が8名、シルバーカーが6名、電動3輪車1名、松葉杖1名である。福祉用具利用の主な理由は足元不安定による転倒防止のためであり、利用のきっかけは病院や社会福祉協議会の勧めが主であった。

外出の主な移動手段は、自動車を運転するのが9名、バイク1名であり、20名（66.7%）は徒歩である。自動車を運転する9名には、運動のためや補助的に自転車に乗る方が4名含まれている。

公共交通機関を利用しているのは17名（56.7%）で、タクシーが9名、乗合タクシーが6名、路線バスの利用が7名であった（複数回答）。美郷町では町内に居住する70歳以上の高齢者に対して、町内発着の乗合タクシーと普通タクシーに利用できるタクシー券を年間1万円

分支給している。このタクシー券や障害者手帳などの補助受給者は14名（46.7%）で、全員、当該交通機関を利用している。中心部のI地区以外に居住するタクシー券の利用者からは「乗合タクシーの利用には重宝するが、普通のタクシーを利用すればすぐになくなる」との意見も聞かれた。公共交通機関を全く利用していないのは13名（43.3%）で、そのうち12名は自動車などを運転しているか、あるいは配偶者が運転している方であった。

必要に応じて送迎を頼んでいるのは10名（33.3%）で、送迎を依頼する相手は、子どもや親族のほか地域の友人・知人であった。子どもや親族に送迎を頼む場合であっても、相手の仕事の都合や迷惑をかける意識を強く感じており、また、友人や知人にあつては、謝礼などの気遣いを負担に感じて「極力、送迎は頼まない」との意見も多く聞かれた。

4) 就労状況

就業（収入を得ている仕事）をしているのは13世帯16名（53.3%）で、業種は農業が12世帯15名、物品販売業1名である。農業を営む方のなかには、足腰が弱り歩行に不安を抱えているため、田畑の管理は親族や知人に委託しているが、水の見回りや周辺の草刈りなど自身のできる範囲で農作業に関わろうとしている方もいる。また、物品販売を営む方は「1日の客数が数名であり経営的にもほとんど利益が上がらない状況ではあるが、交通手段がなく買い物に行けない方や、急な調達に応えるため、また、買い物に来た方のおしゃべりの場として仕事を続けている」とのことであった。さらに、「現在の品揃えに対して広すぎる店舗の一部を、サロンの場として活用できないか」との思いも語られた。残りの13世帯14名は（46.7%）就業していないが、うち10名は家庭菜園程度の農作業はしている。

つまり、多くの方が仕事をはじめとして、それに代わる何らかの作業をしている。

2. QOL評価

1) 評価尺度

QOLの評価指標としてWHO QOL26を用いた。本指標は26の項目を5件法で評価している。また、評価項目の内容から「Ⅰ身体的領域」「Ⅱ心理的領域」「Ⅲ社会的関係」「Ⅳ環境」「全体」の5つの領域に整理している。

本研究では、4項目（Q11、Q17、Q21、Q26）を除く22の指標について回答を得た。

2) 評価結果

図2は、QOL評価の各質問項目について、全対象者の平均点（各問とも5段階評価で最低1点最高5点とし

て平均点を算出)を示したものである。

評価が最も高かったのは「友人の支えの満足度(Q22)」の4.43であり、次いで「家の周囲を出回る頻度(Q15)」の4.37であった。また、平均が4点を超えているのは「生活環境の健康度(Q9)」「余暇を楽しむ機会(Q14)」「睡眠の満足度(Q16)」「人間関係の満足度(Q20)」「医療施設や福祉サービスの利便性(Q27)」であった。つまり、地域住民との付き合いと生活環境への満足度は高く、周囲へ出かけたり余暇を楽しむ機会にも満足している。また、国保診療所、特別養護老人ホームやデイサービス、活動が盛んな社会福祉協議会が1か所ずつ整備されていることから、日常的なサービスの利便性という点から医療・福祉サービスに対する評価が高いものと推察される。

一方、評価が最も低いのは「痛みや不快感による活動制限(Q3)」の2.43であり、「周辺の交通便(Q25)」2.63、「日常生活での治療の必要性(Q4)」2.73と続く。つまり、健康面の問題により日常的に治療が必要となり、その結果、活動が制限されていることと、中山間地域の限られた交通環境がこの結果をもたらしたと考えられる。

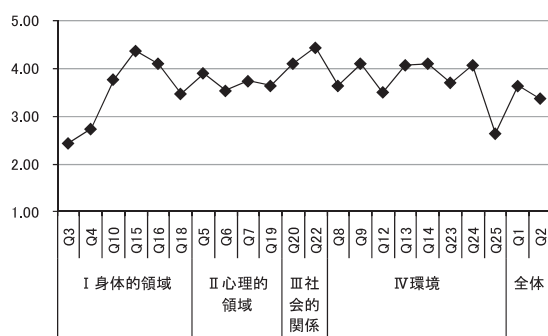


図2 QOL評価点(平均)

図3は世帯構成別に項目の平均点を示したものである。両者の差異をみると、「活動制限(Q3)」、「治療の必要性(Q4)」、「交通の利便性(Q25)」は、全体でみたときと同様に、単身、夫婦とも3点未満の低い評価であり、これらは高齢期の共通の課題である。一方で、「友人の支え(Q22)」と「情報の獲得(Q13)」は共に4点を超え評価が高く、昔からの住民同士のつながりや、その間に構築された小コミュニティならではの情報伝達といった、中山間地域居住の特徴として捉えることができる。

単身の場合は「出回る機会(Q15)」の評価がとくに高く、他者との交流、接点を求めている様子がうかがえる。一方、夫婦の場合は「睡眠の満足度(Q16)」の評価が高く、同居者の存在が夜間の安心感へと作用しているものと推察される。

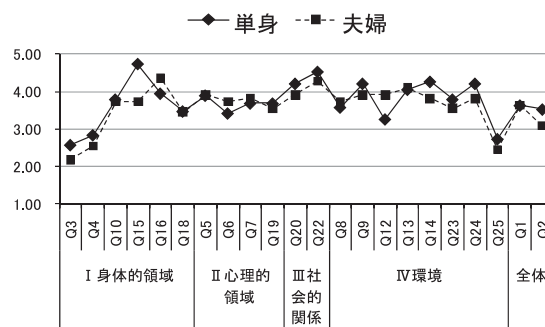


図3 世帯構成別のQOL評価点(平均)

3) クラスタ分析

各調査対象者について、22項目の評価点を用いてクラスタ分析を行うことで、QOL評価に特徴のあるグループの抽出を試みた。分析にはPASW Statics 18を用いた。

Ward法によるクラスタ分析の結果、3つのグループを得ることができた。それぞれのグループについて5領域の平均点を比べると、QOL評価点が高・中・低のグループに分かれていることがわかる(図4)。そこで、これらのグループを、以下、【高QOL群】、【中QOL群】、【低QOL群】と呼ぶこととする。

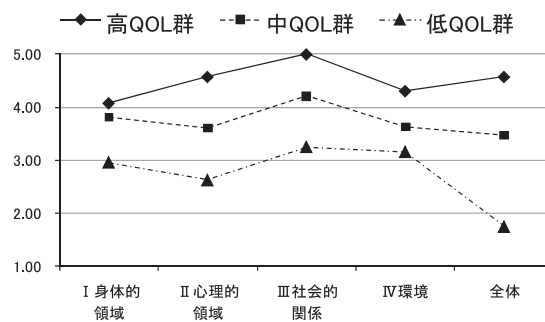


図4 グループ別のQOL評価点(領域別平均)

QOL評価の22項目について、各群を比較しその特徴をみる(図5)。

【高QOL群】は、「活動制限(Q3)」、「治療の必要性(Q4)」、「交通の利便性(Q25)」の評価が低いほかは、すべての項目が4点を超えている。

【中QOL群】は「活動制限(Q3)」、「交通の利便性(Q25)」の評価が2点台で低く、その他の項目はおおむね3点台である。社会的関係を示す領域Ⅲの2項目(Q20、Q22)はいずれも4点を超えている。

【低QOL群】はどの項目も全体的に評価が低く、なかでも「活動制限(Q3)」、「生活の活力(Q10)」、「仕事

をする能力の満足度（Q18）」、「必要なものを買うお金の所持（Q12）」、「健康状態の満足度（Q2）」は、評価が2点未満である。健康状態が悪く、また、経済的にも不安を抱えていることが、自身の能力や生活の活力に対して低い評価を与えているものと推察される。

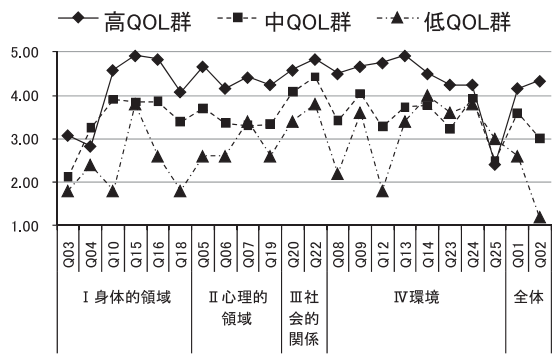


図5 グループ別のQOL評価点（平均）

3. 外出行動の実態

ヒアリングで聞くことのできた外出目的は29項目に整理できた。その内容を踏まえて、表3のように分類、整理した²⁾。

表3 外出目的

外出目的			外出目的		
家事	家庭雑事	買い物	レジャー活動	スポーツ	グランドゴルフ
		手続き			体操教室
		墓の手入れ			温泉
		元家の掃除			個人的趣味
		家族の見舞い			サイクリング
通院	仕事関連	農作業	会話・交際	訪問	ドライブ
		清掃業務			趣味・教養
		生産活動			サロン活動
社会参加		地区の行事			集会
		婦人会活動			おしゃべり
		老人クラブ活動			見守り訪問
		奉仕活動			子どもを訪問

図6は、表3で整理した外出目的ごとにその数を累積したものである³⁾。

これをみると、主な外出目的は「買い物」と「通院」そして「訪問」であることがわかる。30名中、それぞれ28名、29名、27名が外出目的として挙げており、これらが高齢者の外出のベースである。次に多いのが「家庭雑事」と「仕事関連」で、これらは「農協や郵便局での手続き」と「農作業」が主である。そのほか、[レジャー活動]として「スポーツ」と「娯楽」、[会話・交際]と

して「サロン活動」も多い。「スポーツ」の主な目的はN区社会福祉協議会が行う「体操教室」であり、「娯楽」の場合は「温泉」である。N区には前身である南郷村が出資して第三セクターが運営する温泉施設があり、食事券付きの送迎バスを運行し、N区住民の積極的利用を図っている。「サロン活動」はN区社会福祉協議会が勧める「いきいきサロン」である。

外出頻度でみると、週1回以上の外出で多いのは「買い物」と「仕事」そして「訪問」であり、これらは日常的な外出目的としても理解できる。月1回以上の外出では「買い物」と「家庭雑事」、「通院」、「サロン活動」で、「買い物」以外の3項目は、その目的から、月単位の定期的な外出として理解できる。

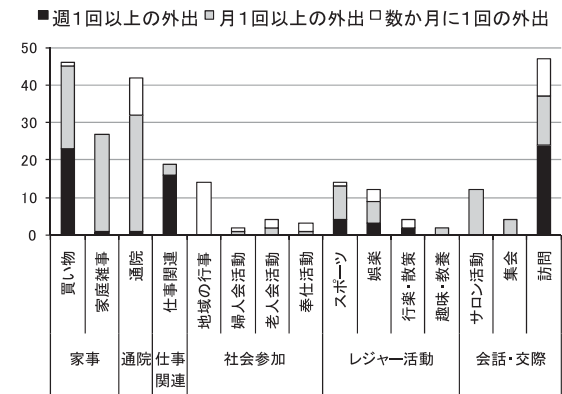


図6 外出目的と頻度

「買い物」については、移動手段の獲得のしやすさ、すなわち、自分で自動車等を運転するまたは配偶者が運転している場合と、そうでない場合とで、買い物の場所と頻度に差がある。

前者は、日向市の店舗をメインの買い物場所として必要ときに中心部I地区の店舗を利用するタイプと、その逆でI地区の店舗をメインとして日向市での通院などのついでに買い物を済ませるタイプに分かれる。

後者は、ほとんどの方がI地区の店舗を主な買い物場所としているが、居住している地区によって買い物の頻度に差がある。I地区の居住者は当然のことながらその頻度は高く、移動手段も徒歩であるのに対し、I地区以外の居住者は月に1・2回程度の頻度で、移動手段は送迎や乗合タクシーであった。

つまり、自身の移動手段を獲得している場合は、品揃えも豊富で値段も安い隣接市での買い物がメインとなり、地元の店舗は必要な場合のみに利用され、一方で自身の移動手段を持たず中心部に居住していない場合は、自由な移動が困難なため、公共交通や送迎などにより通

院や手続きのために中心部へ外出したついでに買い物を済ませ、買い溜めや週に1・2回の行商、あるいは子どもらの差し入れなどで、物品を調達している。すなわち、自由な移動手段の獲得は外出範囲だけでなく頻度にも大きな影響を与えているといえる。

4. 地域生活とQOL評価との関係性

1) 外出行動とQOL評価

表4はすべての対象者について外出目的ごとにその頻度を示したものである。ここで注目したいのは、[仕事関係]と[社会参加]、[レジャー活動]、そして「会話・交際」をしている人数とその頻度である。

グループをまとまりとして概観すると、[仕事関連]は【高QOL群】と【中QOL群】は7割程度の方が行い、その頻度も週1回以上と多いのに対し、【低QOL群】は、まったくしていない。また、[社会参加]と[レジャー活動]、[会話・交際]での「サロン活動」と「集会」では、【高QOL群】と【中QOL群】はいずれも半数以上の方がしているのに対し、【低QOL群】はしている方が少ない。[会話・交際]での「訪問」は、している方の数ではグループ間の差異は認められないが、【高QOL群】は訪問の範囲が広く、その頻度も多くなっている。すなわち、【低QOL群】は外出目的が「買い物」と「通院」、友人・知人との「おしゃべり」に限られ、非常に限定的であると

表4 外出行動とQOL評価の関係

グループ	ID	家事		通院	仕事 関連	社会参加	レジャー活動				会話・交際					
		買い物	家庭雑事				スポーツ	娯楽	行楽・散策	趣味・教養	サロン活動	集会	訪問			
													おしゃべり	見守り訪問	子どもを訪問	親戚を訪問
高QOL群	15	●	◎	◎	●		●	◎	○		◎			●		
	1	◎	◎	◎ ○	●	○	◎	◎	●	●	◎	◎			○	
	2	●	◎	◎	●		●				◎			●	◎	
	8	●	◎	◎	◎	○					◎	◎				
	11	● ◎	◎	◎	●	○ ○ ◎	◎	◎	○		◎		●		○	●
	26	● ◎	◎	◎ ○	● ◎								●			●
	3	◎	◎	◎ ○	●								●			○
	5	●	◎	◎ ○		◎							●			○
	6	◎	◎	◎		○ ○				◎	◎		●		●	
	12	● ◎		◎	●	○ ○	◎	◎	○		◎		◎		○	
14	◎		◎			○				◎		◎		◎	◎	
21	● ◎	◎			○					◎		●	●	◎	◎	
12名		12名	10名	11名	8名	7名	7名				7名	11名				
中QOL群	4	◎	◎ ● ◎	◎	●		◎				◎					
	18	● ◎	◎	◎	●	○	◎		◎		◎				◎	◎
	28	●	◎	◎	◎								◎		○	◎
	7	● ◎	◎	◎ ○	◎	○		○					◎			◎
	9	● ◎	◎	◎	◎	○							◎			
	13	◎	◎	◎ ○	●	○		○						●		○
	17	● ◎	◎	◎	●	○	◎	●					●		◎	●
	19	● ◎	◎	◎ ○	●											●
	24	●		◎	◎	○	●				◎		◎			
	30		◎	◎	●	◎ ○	◎	◎			◎		◎			
	10	● ◎	◎ ◎	◎ ○		○ ○			●		◎		◎			●
	20	● ○	◎	◎ ○	●				●		◎		◎		○	
	25	◎	◎	◎							◎	◎	●			
13名		12名	12名	13名	9名	7名	9名				6名	10名				
低QOL	29	◎		◎									●			
	16	● ◎	◎	◎				◎			◎		●			
	22	●		●		◎					◎		◎		○	
	23	●	◎	◎		○	●	◎					●			
	27			◎									◎		○	
6名		5名	2名	6名	0名	2名	2名				2名	5名				

※表中人数は、該当枠の外出をしている人数

【凡例：● 週1回以上 ◎ 月1回以上 ○ 数か月に1回】

いえる。

つまり、多様な外出の機会はQOL評価に高い影響を与え、逆に外出の機会が少ないことは仕事や作業をする機会の減少にもつながり、QOLに低評価を与えるものと推察される。

2) 子どもの帰省頻度とQOL評価

表5は子どもの帰省頻度とQOL評価の関係を示したものである⁴⁾。子どもの帰省頻度で最も多いのは「月に1回程度」の12名(40.0%)で、月1回以上を累積すると19名(63.3%)であり、半数以上の方が子どもとの付き合いを定期的に継続している。

注目すべきは【高QOL群】において子どもの帰省頻度が高い点である。頻度の高い定期的な子どもの帰省がQOL評価に良い影響を与えていることが示唆される。

表5 子どもの帰省頻度とQOL評価の関係

帰省する頻度	高 QOL群	中 QOL群	低 QOL群	全体
週1回程度	2	0	0	2
月に3・4回程度	1	0	0	1
月に2・3回程度	1	0	0	1
月に2回程度	1	0	0	1
月に1・2回程度	0	1	1	2
月に1回程度	6	5	1	12
年に数回	0	3	1	4
あまり帰省しない	0	1	2	3
子どもはいない	1	3	0	4

単位:名

結論

以上より、中山間地域に居住する高齢者のQOL向上に資する福祉のまちづくりの基本的な要件を示す。

第一に、健康状態を踏まえた歩行能力に対する予防的対応である。QOL評価を低くする事項として、治療を伴う健康問題による活動制限がある。高齢期においては、何らかの健康上の問題が生じる。とくに下半身の不安定は移動に制限を与え、かつ転倒などの危険を誘発する。したがって、早期の予防対策として、移動を補助する福祉用具等の使用を勧めることが重要となる。ただし、過度の福祉用具の提供、具体的には車いすレベルでない方への車いすの提供などは、逆に身体機能の低下を来す恐れもあるので、自立歩行を継続させる段階的な利用を促すが必要である。

第二に、安価で利便性の高い移動手段の獲得である。自身で自動車など移動手段を獲得している場合は、活動

範囲も広くまた外出の頻度も多く、QOLの高評価に寄与している。一方で、移動手段が制限されている場合は、活動範囲も狭く限定的で、頻度も少ない。活動範囲の制限は、仕事や作業の制限だけでなく他者との交流の機会を失わせ、自身の活動能力の満足度や生活の活力の低下へとつながり、QOLの低下に影響を与える。

また、多くの高齢者においてQOLに低い評価を与える共通の事項として、交通環境の不備がある。中山間地域においては、人口減少とともに公共交通の利用者も減少し、N区においても徐々にバス路線が廃止されてきた。現時点では、日向市とN区中心部を結ぶ1路線のみで、朝夕の通学時間の運行である。自動車の運転を控える高齢者がますます増加することを考えると、公共交通機関の整備は重要な課題である。現状ではその代替手段として、自治体独自の乗合タクシーの利用のほか、子どもら親族や近隣住民の送迎により移動手段を獲得している。しかし、内面では同乗中の事故や送迎に対する気遣いなど、心理的な負担が生じている。タクシーの利用も考えられるが、経済的にゆとりがない場合においてはそれも困難となる。このような点からも安価で時間的にも融通の利く交通環境の整備が必要である。この点については、現在、地元のタクシー会社が受託、運行している乗合タクシーの活用が最善の方策と考えられ、より乗車率を高める研究が必要であろう。

第三に、多様な外出機会の提供である。農作業などの仕事やそれに代わる作業の継続、あるいは社会活動や余暇活動の場に出向くなど、多様な外出の機会は日常生活の変化や他者との交流の機会を生む。これは生きがいにもつながり、QOLにも好影響を与える。健康状態が低下しても外出機会を獲得しうる支援や仕組みが必要である。N区においては、生産型サロンや住民による生産グループがあり、さらにこれらが生産した商品を持ち寄り販売する販売所もある。サロンや生産グループの活動拠点は自宅から徒歩圏内にあり、これら生産・販売型の取り組みは製造する喜びと販売する責任を喚起し、高齢者のQOL向上に期待できるものと考ええる。

最後に、子ども世帯との連携である。QOL評価の高い方の多くは子どもの帰省頻度が多かった。単身はもとより、夫婦であっても子どもは緊急時の連絡だけでなく、重要な相談相手にもなり、安定的な帰省は日常の生活へ安心感を与える。加えて、頻度の高い定期的な帰省により、子ども世帯を迎え入れる準備や帰省を待つ楽しみなどが生まれ、生きがいにもつながる。これらの安心感や生きがい感がQOLの向上に寄与するものと言える。

本研究を進めるにあたり、調査に快く協力いただいた南郷区住民の方々、また、研究資料の提供や調査対象の選定、調査への同行にまでご協力いただいた美郷町社会福祉協議会南郷事業所の皆様には、心から深謝申し上げます。

本研究は平成21年度科研費若手研究（B）（課題番号：21760494）、および平成21年度九州保健福祉大学学内共同研究の一部として実施した。

註

- 1) WHO QOL26の評価項目は下記のごとくである。
 I 身体的領域：Q3 痛みなどによる活動制限 Q4 治療の必要性 Q10 生活を送る活力 Q15 出回る機会 Q16 睡眠 Q17 活動遂行能力 Q18 仕事能力
 II 心理的領域：Q5 生活の楽しさ Q6 生活の意味 Q7 集中力 Q11 容姿 Q19 自身への満足 Q26 不安感の頻度
 III 社会的関係：Q20 人間関係 Q21 性生活 Q22 友人の支え
 IV 環境：Q8 安全性 Q9 生活環境 Q12 経済力 Q13 情報量 Q14 余暇の機会 Q23 周辺環境 Q24 医療福祉の利便性 Q25 交通便
 全体：Q1 生活の質 Q2 健康状態
- 2) 得られた外出目的はNHK放送文化研究所による国民生活時間調査を参考に整理した。「地区の行事」には、地区で行われるイベントや祭りなどの行事のほか、小学校とのふれあい教室が含まれる。「個人的趣味」はパチンコと釣りが含まれる。「集会」は仲間との会合や友人同士の食事会が含まれる。
- 3) 「週1回は地元の商店で買い物をし、月1回は日向市に買い物に行く」という場合には「買い物」の数を2として算出し、すべての調査対象者の外出目的を累積している。
- 4) 帰省頻度については具体的な頻度を示して質問をし

ていないため、「頻繁に」や「しょっちゅう」、「たびたび」、「ちよくちよく」といった抽象的な回答が含まれた。これらは比較的頻度の高い表現と考え、すべて「月に1回程度」として集計した。

参考文献

- 1) 南郷村史編集委員会（1996）『南郷村史』南郷村
- 2) 田崎美弥子・中根允文（1997）『WHO/QOL-26 手引』金子書房
- 3) 日本村落研究学会編（2007）『むらの社会を研究するーフィールドワークからの発想』農山漁村文化協会
- 4) 美郷町（2009）「美郷町総合計画 平成19年度～平成28年度」
<http://www.town.miyazaki-misato.lg.jp/534.htm>, 2010年9月24日)
- 5) 宮崎県福祉保健部監修（2008）『宮崎県の福祉と保健 平成20年度版』宮崎県社会福祉協議会
- 6) 全国社会福祉協議会編集（2008）『「ふれあい・いきいきサロン」のてびき～住民がつくる地域交流の場～』全国社会福祉協議会
- 7) NHK放送文化研究所 編（2001）『データブック 国民生活時間調査2000《全国》』NHK出版
- 8) 登張絵夢・竹宮健司・上野淳「農山村地域にみる高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究 高齢者の生活における「地縁」に関する試論」『日本建築学会計画系論文集』第540号, 125-132
- 9) 室永芳久・両角光男（2002）「熊本市における高齢者の外出行動変化に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第553号, 201-207
- 10) 三橋伸夫（2003）「外出行動からみた中心集落立地の変化」『日本建築学会計画系論文集』第566号, 33-38
- 11) 平井寛（2005）「高齢者の外出状況と満足度」『農村計画学会誌』第7集Vol.24, 265-270